



TITLE:

男鹿[半]島に於ける二つの[港]町の
特色

AUTHOR(S):

小田内, 通[敏]

CITATION:

小田内, 通[敏]. 男鹿[半]島に於ける二つの[港]町の特色. 地球 1926, 5(4):
328-333

ISSUE DATE:

1926-04-01

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/183084>

RIGHT:

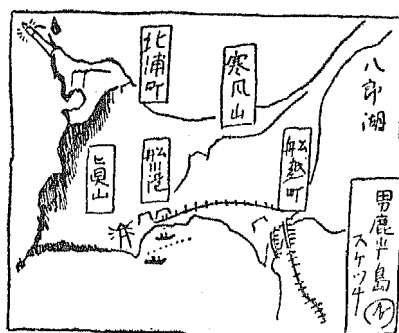
男鹿半島に於ける二つの港町の特色

小田内通敏

日本海岸の羽後の國の沖合に長く島だつた男鹿は、砂丘の堆積物と湖底からの堆積物によつて主陸と結付いて半島になつた。此の半島は今日行政的に三つの町と七つの村から成立ちてゐるが、其の村や町を形作る大字小字の部落々々は、谷間から潟端にはた磯邊に位しつゝ、其の生存の要件に適ふやうに、一つの獨立家屋から數多い群落到まで夫々異つた形體をなしつゝ集團をなしてゐる。其の數多い集團の中から此處には島としての特質と半島としての特質を、其の成立の條件としてゐる二つの港町——北浦と船越——の特色に就いて述べてみたいと思ふ。

男鹿の海岸は、小さい河口附近に僅かばかりの平地を見る外には、押なべて磯か崖ばかりであるから、海沿ひの部落から部落に傳ふ通路で

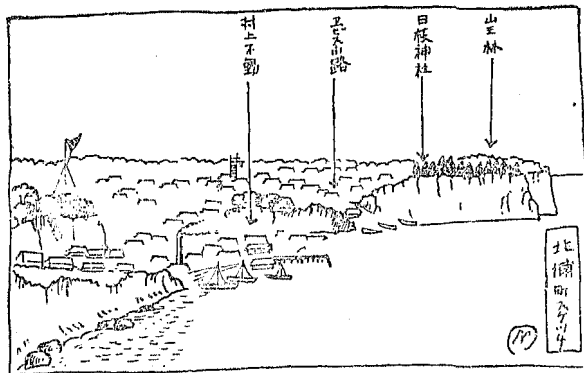
さへ、磯傳ひの所が少なく、回り路をするか又は高い山路を越さねばならない。従つて部落々々は夫々孤立の狀態に置かれ、其處の住民の生業は何れも漁業を主とし農業を副としてゐる。



戸の部落ではあるが、水田少なく畑地には多く馬鈴薯を栽培して晝飯に代用するを常とする。

耕田が少ないから雑食の所が多い。例へば北岸即ち北磯の中で西黒澤は六十

住民の祖先は遠い北陸の加賀あたりの漁夫や、一向宗徒の漂着したものゝ定住したものらしい。主陸からかけはなれた島の磯邊の村としては、かゝる生活條件と定住者の郷里を見出すのは寧ろ當然である。北磯沿ひの部落の多くは、



男鹿半島に於ける二つの港町の特徴

この西黒澤のやうに孤立してをり、其の生業も漁を主としてゐる。従つて戸數は多くなく、多いので三四十戸である。然るに北浦のみが享保十五年頃に百十戸を有してゐたのは、其所には小さいながら

賀茂川が注いで、(一)川沿ひに田畑が開き得るばかりでなく、(二)川口の左岸近くの海岸に高さ十米から十五米の臺地(第三紀層)が、南西から北東の方向に海に向つて突出で、それが「間」即ち北浦灣を抱いて日本海で最も脅威とする北西風(相バタ風)から多くの漁舟を避難さすやうになつてをり、(三)それに臺地の南東側が賀茂川に向つてなだらかなつて自からの居住の適地たる地理的條件を具備してゐるからである。即ち我々はこの北磯に島としてかけ離れた男鹿の漁村が、其の地理的條件に促されつゝ地方的の港町として生ひ立つ姿を見る事が出来る。

然るに港町としての船越の發達は、地形の上からしても主陸との交通關係からしても、男鹿が半島となつた事から出發してゐる所に北浦と著しい相違がある。即ち北浦は日本海に沿ふた第三紀層の臺地の上に立つてゐるのに、船越は八郎潟口から日本海に通ずる水道に沿ふた平たい砂丘の上に立つてゐる。其の砂丘の北側と南側には湖底からの堆積物で出来た低濕地が續き

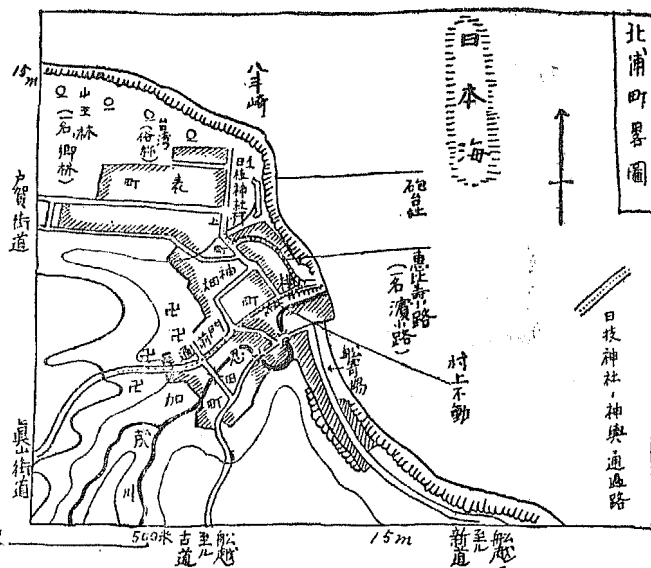
それが田に開拓されつゝある。船越と水路を隔てゝ相對してゐる天王も、砂丘の上に立つてゐるばかりでなく其の砂丘の方向が北西から南東の方向に連つてゐる事、其の北側と南側には湖底からの堆積物から出來た低濕地が水田となつてゐる事が、何れも船越附近の地形の連續らしい事を示してをり、船越の地名が全國を通じて二つの水面の間に介在してゐる狭い地頸部に附けられてゐる所から推して、此處ももとは船越から天王に續いた一帯の砂丘であつたらしく考へられる。

靜かな潟の入口に立つ船越は、北浦が荒い海の漁を主な生業とするやうに潟の漁を主な生業とし、農業には砂丘を畑に低濕地を水田に利用した。天王の田地が天和四年に古田をもつてゐたのに船越の田地が享保十六年に始めて古田にされた記録がある。

漁村から島の地方的港町として發達した北浦が、それに適した地理的條件を備へたやうに半島の門口としての船越の地理的位置は、渡場と

しての港町の萌芽を成長せしめたと共に、主陸と半島との仲繼驛として進展せしめた。今二港の發生を比べてみると、北浦が臺の上の日枝神社前からやや下つた村上不動のある崖の上の邊に發生したのは、日枝神社背後の山王林（一名郷林）はもと鬱蒼たる潤葉樹林で、それが冬季の北西風を防ぐと共に其の臺地は魚見によい展望地點であり、其の麓からはよい飲料水を得られたからである。之に反して船越は渡場としての水道に面した地區即ち中町附近（もとの渡船場）に其の發生を見たであらう。水陸交通の衝に當つてゐた此の港町が、徳川時代に相當に賑つた事は「寛政頃迄は五城目や能代などから出る雜穀や材木を船越に集積し、それが織物や漆器を積んで來た加賀の商船と盛んに取引し、土崎港なども多くの商品を船越から仕入れたほどであつた。加賀の商船は銚子口（海への出口）から水道を遡り八朗潟にはいつたものだ」といふ古老の言葉に徴して明かである。しかし要驛として進展すべき礎は元龜年間に男鹿の大庄屋森元祐

北浦町界圖

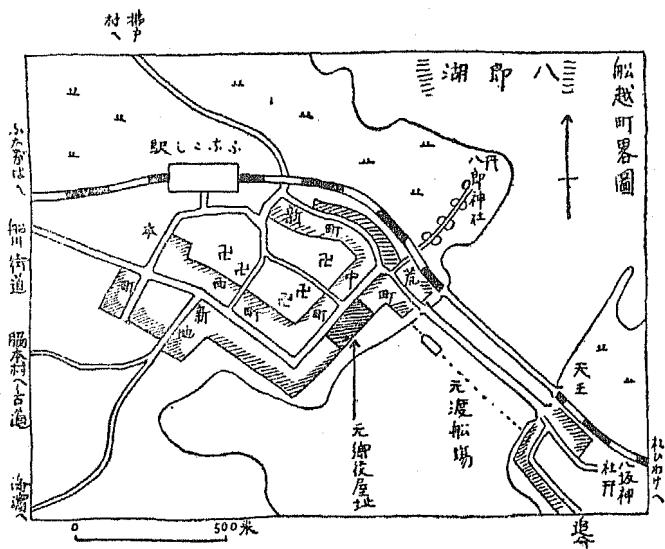


北浦町は第三紀層の台地と、加茂川べりの少しの沖積層に建てられてゐます。古い部分には日枝神社の神輿の通ずる道路だらうと思ひます。エビス小路は更に原始的な漁村を思ひ出させまへ。表町は郷士を置いた十族町です。寧ろは新開地で貧民窟です。

——奈良環之助畫及び解説——

男鹿半島に於ける二つの港町の色

船越町界圖



船越町の鎮守は向岸の八坂神社であることは、面白いことと存じます。本町は郷士の士族町で、北浦の表町に相當してゐるのも面白い對照です。

——奈良環之助畫及び解説——

第五卷

第四號

三二

六七

膳が此地に來住した事によつて置かれ、其の子孫が佐竹氏遷封後も男鹿の大庄屋として全島開墾を引受けてゐたから、當時の船越は港町としてはた古宿驛として半島の咽喉を扼してゐたであらう。而して佐竹氏の直百姓としての男鹿の入口たる船越に、見廻役と足輕とを勤務さした御役屋の置かれた事も、町としての存在に一段の輝きを添へたであらう。

今地圖について二つの港町の發達を見るに、北浦は前に述べた山王林附近の高地がもとで、段々低い賀茂川の方に發展して行つたものらしく、今の町の重要部として會社・銀行・商店・倉庫などの立並んでゐる川口附近の海濱の地區は、僅かの苦屋を見るに過ぎなかつたらう。此の發達の順序を裏書するものは、日枝神社の祭典に於ける神輿の通る道順で、神社から恵比壽小路を経て横町から門前通を通り其の町端から引返すやうになつてゐる。主陸との連絡地點である船越町の重要地區が渡船場に近い中町を中心として水道に接近してゐる所であるべきは當然で

ある。元龜年間森元祐膳が此町に來住してから、榎村が八朗潟に遠いから漁業に不便だといふ願を許し其の子肝煎治右衛門が中町を開いて合村したとあるが、中町から西町を通つて脇本に赴くのが、低濕地ならぬ砂丘の上を通る上からしても、これが重要な町となつた。常町の六ヶ寺が何れも此の中町と西町に面してゐるのも、之を物語るものと思ふ。其後徳川末期に出來た潟西の拂戸の開墾につれ、此の方面に通ふ道路として新町が出來、海岸の漁場にゆく爲には西町の南裏に新地が出來た。かく港町として發達した船越には商業も盛んであり太田・西村・天野などの大商人もあつた。否大商人が出たばかりでなく、『絹節』の著者鈴木平十郎をも出した事は、船越が北浦のやうな單に地方的の港町でなく、政治・經濟・交通の中心地であつた爲に、自から文化の醗酵を醸した結果と見て差支ない。今氏の教養を詳にする事の出來ぬのを遺憾とするが、文久元年に描れた同氏の肖像(五十一才)の顯辭の數句を摘記すると、

船越村村正名重孝稱平十郎自初奉事於館舍誠實就實其爲功也亦多矣：弘化丙午七月賞十餘年間之勞及獻金七十兩除其鹽稅：萬延紀元閏三月二日公欲試馬力騎至船越平十郎獻其所著絹節三冊雄鹿海岸圖一卷眞本兩山圖一卷公召之於舟褒曰好纂千丹誠々々乃以白木框載金子三百匹賜之

余も此の『絹節』を通覽したが、良質の楮紙に著者の自から探聞した男鹿の各村の現状・傳說・奇事・異聞を細大漏らさず記したものであり、雄鹿海岸圖は鳥瞰圖風の描法で、海岸を一直線に繪巻物として書いたもので、海の深さなども一々何間を隔つる所深さ何尺と記されてある。これに據れば鈴木氏は全く男鹿の生み出した郷土地理學者である。

北浦の港町の發達が遅いながらも一步步生長してゆくのに比して、船越の現状の甚だ振はないのは、廢藩に伴ふ御役屋の廢止、土崎港や舟川港の發達、陸路の開通など、相集つて男鹿の咽喉部として船越の職能を減殺したのに原因する。それが著しく出寄留者の數にあらはれて

をり。即ち明治三十二年から十年毎に、二百九人から三百八十四人それから五百九十二人と増して來てゐる。これ北浦が、地方的港町として發達すべき地理的條件に依據しつゝ生長して來たのに、船越は交通上の人文現象が其の盛因の基礎だつたから其の基礎の動搖に伴ふて崩壊するに至つたのは當然の歸結である。

日本の聚落の地理學的研究の對象として、特定した地域の研究は、最も重要なものと思はれる。しかし集團形體の類型から或は村或は町或は市に關する資料を集め、村は村として、町は町として、また市は市として如何に地理學的意義があるかを明にする事も亦一つの方法ではあるまいか。日本の現在に於て村と市とは行政上の立場から比較的資料を得やすいが其中間に位してしかも村や市よりも、明治以後に於ける地方事情の著しい變遷を受くる町に就いての研究資料は得にくいから聚落地理の研究の上からも今のうちに標式的なものの丈でも共同して蒐集したらどうかと思ふ。(大正一五、二、二三)

以上は秋田縣南秋田郡の聚落の研究資料を奈良環之助氏と共に集めたものに據つたものである。挿圖は奈良氏の筆である。